

香川県立保健医療大学リポジトリ

小学生の病気対処行動の実態：小学校低学年の場合

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三浦, 浩美, 小川, 佳代, 谷本, 公重, 舟越, 和代, 井口, 千鶴子, 奥田, 紀久子, 宮本, 政子, 猪下, 光 メールアドレス: 所属:
URL	https://kagawa-puhs.repo.nii.ac.jp/records/202

小学生の病気対処行動の実態

—小学校低学年の場合—

三浦 浩美^{1)*}, 小川 佳代¹⁾, 谷本 公重²⁾, 舟越 和代¹⁾, 井口 千鶴子³⁾,
奥田 紀久子⁴⁾, 宮本 政子¹⁾, 猪下 光²⁾

¹⁾香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科,

²⁾香川大学医学部看護学科,

³⁾前香川県立医療短期大学看護学科, ⁴⁾瀬戸内短期大学

Illness Behavior of Elementary Schoolchildren: Schoolchildren in the Lower Grades

Hiromi Miura^{1)*}, Kayo Ogawa¹⁾, Kimie Tanimoto²⁾, Kazuyo Funakoshi¹⁾, Chizuko Iguchi³⁾,
Kikuko Okuda⁴⁾, Masako Miyamoto¹⁾ and Hikari Inoshita²⁾

¹⁾Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences,

²⁾School of Nursing, Faculty of Medicine Kagawa University, ³⁾Former Department of Nursing,

Kagawa Prefectural College of Health Sciences, ⁴⁾Setouchi Junior College

Abstract

A questionnaire survey of 823 schoolchildren in the lower grades of elementary school was conducted to grasp their understanding about how to behave when their physical condition is poor. The findings are as follows.

1. Seventy to eighty percent of the schoolchildren chose actions appropriate to symptoms, proving themselves capable of appropriate judgments.
2. Seventy to eighty percent of the schoolchildren chose the answer, "I tell any symptom to my parents or other members of my family," whereas three to four percent chose the answer, "I will have patience." These responses seem to reflect their different stages of growth and different experiences they had had so far. We get suggesting that it is significant how to have relations with children the family and teachers in daily life.

Key Words: 健康管理 (Health Care), 小学校低学年 (Lower Elementary School Children), 病気対処行動 (Illness Behavior)

*連絡先: 〒761-0123 香川県木田郡牟礼町大字原281-1 香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科 三浦 浩美

*Correspondence to: Hiromi Miura, Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences, 281-1 Hara, Mure-cho, Kita-gun, Kagawa, 761-0123, Japan

序 論

保健行動には予防的保健行動と病気対処行動が含まれる¹⁾。子どもの場合、成長発達に応じた日常生活習慣の獲得の過程は明らかにされ、その段階に合わせた適切な健康教育も行われている。一方、病気対処行動の獲得過程については明らかになっておらず、保護者に依存している場合が多い。しかし子どもの理解度に応じた病気の時の適切な対処行動についての教育は、子どもが体調不良を感じたときに主体的に対処していくために重要であり、そのことは将来の健康管理や慢性的な病気になったときに活かされを考える。そこで、子どもが体調不良を感じたとき、どう対処すればよいと認識しているかについての実態を明らかにし、今後の健康教育の資料とすることを目的として、今回、小学校低学年に調査を実施し、示唆を得たので報告する。

方 法

1. 対象者

A 県内の 4 小学校の 1～3 年生 823 名を対象者とした。

2. 調査期日

2003 年 9 月～10 月。

3. 調査方法及び調査内容

独自で調査票を作成し、自記式質問紙集合調査を行った。

調査内容は基本的属性と病気対処行動に関する認識である。病気対処行動に関する認識は、保健室を訪れる主な理由である腹痛・頭痛・倦怠感を挙げ、これらの症状がある時にどうすればよいと思うか、21 の行動を絵と言葉で示し、よいと思うもの全てに○をつけてもらった。小学校低学年 35 名にプレテストを行い、分かりにくい表現等は修正した。

4. 倫理的配慮

管轄の教育委員会及び各学校の校長を通して調査を依頼した。調査に際しては、担任により強制ではないこと、無記名であること、思った通り書いてよいこと、成績には関係しないことを説明し、承諾を得た上で実施した。

結 果

有効回答 712 名（有効回答率 86.5%）であった。

1. 対象者の背景（表 1）

対 象 者 は 1 年 237 名（33.3%）、2 年 222 名（31.2%）、3 年 253 名（35.5%）、男 児 357 名（50.1%）、女 児 355 名（49.9%）だった。一人っ子 72 名（10.1%）、2 人きょうだい 403 名（56.6%）、3 人以上 237 名（33.2%）であり、核家族 478 名（67.1%）、拡大家族 234 名（32.9%）であった。

表 1 対象者の背景 (N=712)

学 年	1 年	237 名 (33.3%)
	2 年	222 名 (31.2%)
	3 年	253 名 (35.5%)
性 別	男 児	357 名 (50.1%)
	女 児	355 名 (49.9%)
家 族 形 態	核 家 族	478 名 (67.1%)
	拡大家族	234 名 (32.9%)
きょうだい	一人っ子	72 名 (10.1%)
	2 人きょうだい	403 名 (56.6%)
	3 人以上	237 名 (33.2%)

2. 病気対処行動に関する認識

1) 腹痛時にとればよいと思う行動（図 1）

50%以上の者が選択した項目は 21 項目中 9 項目であった。多い順に「家の人に言う」545 名（76.5%）、「トイレに行く」520 名（73.0%）、「担任の先生に言う」485 名（68.1%）、「保健室に行く」463 名（65.0%）、「薬を飲む」460 名（64.6%）であった。

2) 頭痛時にとればよいと思う行動（図 2）

50%以上の者が選択した項目は 21 項目中 8 項目であった。多い順に「家の人に言う」549 名（77.1%）、「頭を冷やす」536 名（75.3%）、「寝る」506 名（71.1%）、「熱を測る」505 名（70.9%）、「保健室に行く」472 名（66.3%）であった。

3) 倦怠感がある時にとればよいと思う行動（図 3）

50%以上のものが選択した項目は 21 項目中 7 項目であった。多い順に「寝る」593 名（83.3%）、「家の人に言う」577 名（81.0%）、「熱を測る」524 名（73.6%）、「担任の先生に言う」476 名（66.9%）、「保健室に行く」474 名（66.6%）であった。

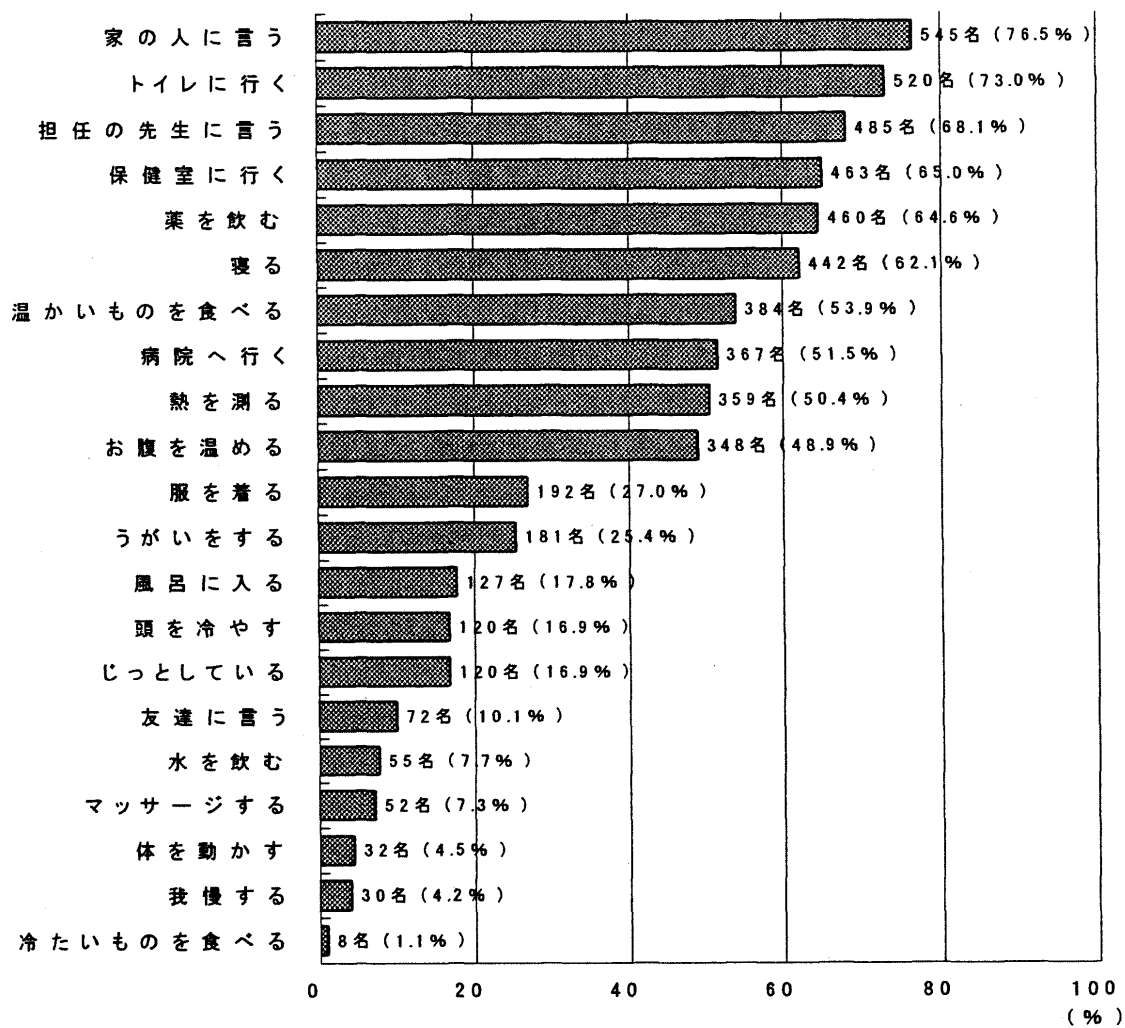


図1 腹痛時にとればよいと思う行動

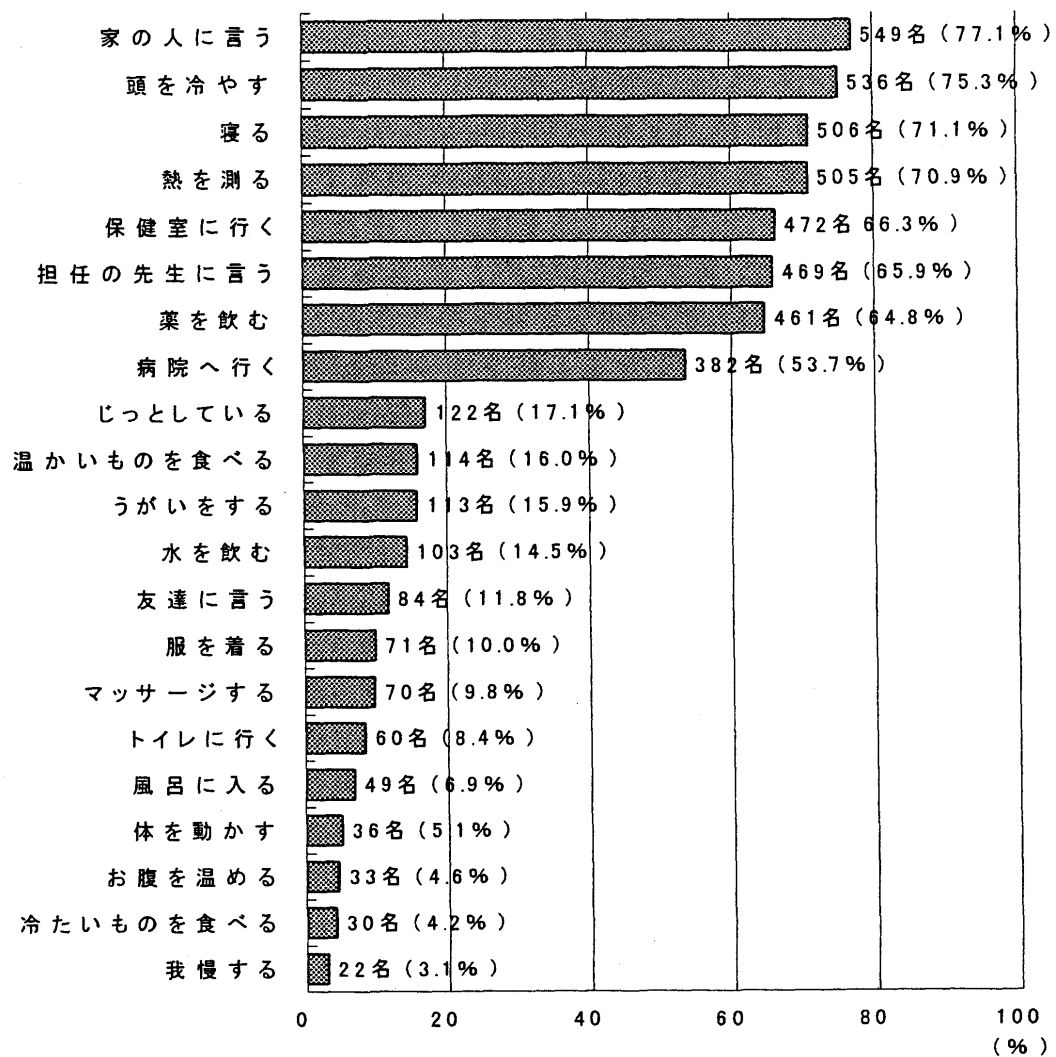


図2 頭痛時にとればよいと思う行動

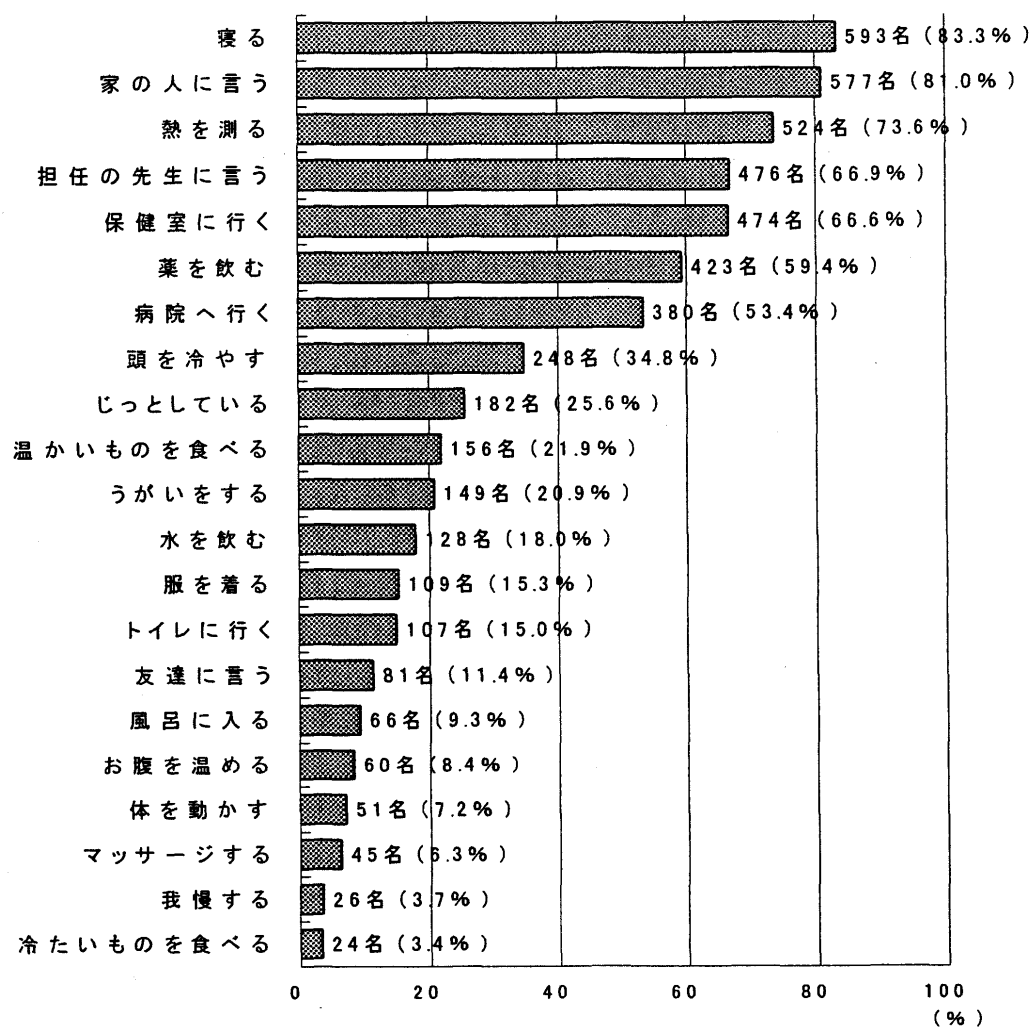


図3 倦怠感がある時にとればよいと思う行動

考 察

腹痛時に「トイレに行く」を選択した子どもが520名(73.0%),頭痛時に「頭を冷やす」を選択した子どもが536名(75.3%),倦怠感がある時に「寝る」を選択した子どもが593名(83.3%)おり,多くの子どもがそれぞれの症状に対応した行動を選択できることが分かった。

「家の人に言う」を選択した子どもは,どの症状でも70~80%程度おり,「担任の先生に言う」「保健室に行く」も50%以上の子どもが選択している。自分である程度適した行動を考えられるが家族や教師にも言う,という行動は,親や教師に守られているという安心感のもとに社会性や自立性を獲得していくという,学童前期の特徴²⁾と合致している。

しかし,「我慢する」を選択した子どもがどの症状にも3~4%いた。これは誰にも言えずに我慢している可能性や,家族や教師に相談した際に我慢するよう言われた経験があることが考えられる。また,「じっとしている」を選択した子どもも15~25%いた。子どもが「じっとしている」という行動を安静として認識している場合と,何もしないと認識している場合の両方が考えられる。小学校低学年は,家族や先生に相談し手当てを受ける経験を重ねることで判断力を身に付け,行動の選択肢が増えていく時期であると考え。健康教育の際には,体調の変化を感じたら,まず周囲の大人に相談するよう説明することが重要であるとともに,子どもからの訴え

があった場合には,判断の過程が分かるように,十分な説明を加えながら,子どもと共に考える姿勢で対応することが大切である。

結 論

小学校低学年の子どもが体調不良を感じたときにどのように行動すべきと考えているか調査したところ,以下のような結果が得られた。

1. 各症状に対応した行動を選択した子どもがそれぞれ70~80%程度おり,多くの子どもが適切な判断ができることが分かった。
2. どの症状でも「家の人に言う」を選択した子どもが70~80%,「我慢する」を選択した子どもが3~4%いた。いずれも子どもの発達段階や今までの経験を反映したものと考えられ,日常生活の中での関わり方の重要性が示唆された。

文 献

- 1) 宗像恒次(1997)“行動科学からみた健康と病気”,メヂカルフレンド社,東京,p86.
- 2) 岡堂哲雄(1999)学童期・思春期の発達臨床心理,“小児ケアのための発達臨床心理”岡堂哲雄(監修),へるす出版,東京,p26-30.

受付日 2004年10月28日